

たったの1年、因縁の1年

大橋秀雄

高円寺で中央線に乗って市ヶ谷で降り、ズックの鞆を肩に隊列を組んで左内坂を登る。二つ目の坂を上ると大銀杏が目に入り、校門をくぐって教室に入る。昭和19年4月入学早々、私が四中に入ったことを大変喜んでいたという父が北京で戦病死。「跡を継いで立派な軍人になりなさい」と母から言われ続けていた私は、当然ながら陸軍幼年学校入学を目指す。担任は強く厳しい福島正義大先生。その薫陶を受けるには、私はあまりにも弱虫だった。東京陸幼には、多くのクラスメートと一緒に合格したものの、加賀町の焼け跡から西八王子の建武台に送り出されてたったの四ヶ月、暑く眩しい敗戦の日を迎えた。

背囊を背負い、満員の上越線のデッキにしがみついて、疎開先の父の郷里、新潟県の山の中に辿り着いた。私はそのときリセットされたらしい。それ以前の記憶は、霞がかかったように茫洋としている。「敗戦のショックが私を変えた」と説明しているが、単なる転地の効果だったのかもしれない。あるいは町の中学まで、朝夕1里の道のりを、暑さに耐え、吹雪に凍えながら歩き通したせいかも知れない。小さいころから悩み続けた胃弱体質は嘘のように消え、自慢できるのは体力だけという境地に達した。夏はバレーボール、冬はスキーと体育系を通したが、そのころの東大入試は素直だったようだ。塾も模擬試験も無縁の田舎高校から、学校で教わることだけで合格できたのだから。

長男が中学生のころ、左内坂の途中にあるマンションに住んでいた。子供が通った牛込三中は、もとの四中と同じ敷地に建っている。戦火をくぐり抜けた大銀杏は依然として健在で、校歌にも「若い命の春ごとに、茂り広がる大銀杏」と詠われている。長男は、その銀杏に見送られて卒業した。次男は有名私大に通ずる高校を蹴って都立戸山高校に入学した。勧めたわけでもないのに、何となく親父の気配を感じ取ったのかしら。当然のように浪人して東大工学部に進んだが、これは血液型が同じせいなのかも知れない。

たった1年のご縁が、思わぬ形で子供たちにも及んでいる。城北会の名簿の中に、1年在籍のはぐれ者を暖かく載せていただくご厚情に、心からお礼申し上げます。

現職など(1999年): 工学院大学学長、東京大学名誉教授、日本学術会議会員、同第5部(工学)部長、日本工学会会長、日本工学アカデミー会員。